



(5)近世後期南北交易の中の由利郡 —仁賀保平沢船問屋の世界—

弘前大学人文学部教授 長谷川成一

はじめに

秋田県内でも有数の銘酒として知られる「飛良泉」の醸造元の、由利郡仁賀保町平沢の齋藤昭一郎氏のお宅は、17世紀初頭以来の歴史と由緒（確実な文書で確認できる）を有する郡内でも屈指の旧家である。本稿では、本荘市史編纂に関わる調査の過程で、齋藤家のご好意で同家の海運や諸品取引、経営に関する膨大な史料を閲覧する機会を得たことから、是非その一端を紹介して、18世紀から19世紀にかけての列島の南北にわたる同家の交易と、その歴史的な意義を明らかにしたい。加えてそれらの中から、近世後期由利郡の商品流通・再生産のあり方にまで言及できれば幸いである。

1 近世の平沢と齋藤家

最上氏の重臣本城満茂ほんじょうみつげによる支配の時期の齋藤家は、元和6年（1620）11月11日の平沢問屋宛の本城満茂家臣原田光俊掟書（『本荘市史』史料編Ⅰ上 本荘市1984年、以下同市史を『市史』Ⅰ上など

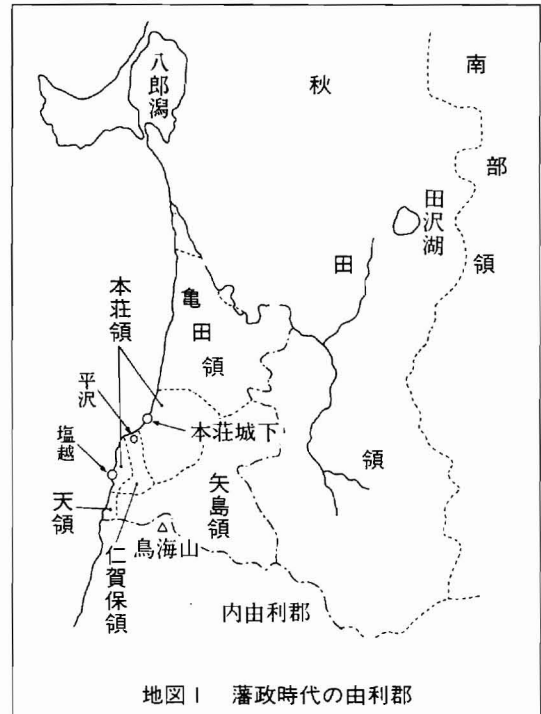
と略記する）によると、伝馬・荷駄問屋として平沢村の陸上輸送に責任を持たされ、さらに問屋役負担の見返りとして鱒船役ぶねやくを免除された（同前）。なお当時期の齋藤家が、海上輸送や海運事業に従事していたとする文書は見当たらない。しかしそれでもって同家が同時期に陸上輸送にのみ関わっていたのではないかと判断するのは早計であろう。

「藤原姓菊池弥高山菊池院浄願寺系譜」いわたかさん（浄願寺文書）によれば、蝦夷島へ北上する浄土真宗の教線の一環として、菊池氏4代しよこしの了乗が16世紀後半に塩越（秋田県由利郡象潟町）へ浄専寺を建立し、ついで同5代このうら了賢が16世紀末に、金浦（由利郡金浦町）に浄蓮寺、船越（男鹿市）に円応寺、能代に願勝寺、庄内の酒田に寺院を建立したという。16世紀に由利郡でも塩越・金浦が蝦夷島への教線拡大の拠点の一つとして位置づけられ、南から北への人・信仰・物の流れを受け止める重要な港湾都市として認められていたことを我々は見逃すべきではなからう。後に紹介する寛政元年（1789）の「平沢齋藤市兵衛等口上書」（齋藤家文書）には、仁賀保郷の中で古来より「商船入津」の

湊は平沢村・三森村、本荘藩領の金浦村・塩越村の4湊であった、と記録している。このことと「浄願寺系譜」の内容を加味すると、中世以来、由利郡の仁賀保郷の湊津はこれらの4湊であった可能性が高く、最上氏支配時代の平沢にあっては、港湾・海運の機能は当然付与されていたはずである。海上輸送関係の史料が斎藤家に見えないのは、次のように考えられよう。最上氏は領内に日本海沿岸でも屈指の港湾都市酒田を持ち、一方の本城氏においては慶長18年(1613)に新たに建設した本城城下が中世以来の湊津である古雪湊を組み込んで、本城氏領内の陸上・海上の流通の結節点としての機能を十分に果たしていた。右の状況からすれば、最上氏や本城氏は、酒田や本城古雪に比較して小規模な平沢の湊や斎藤家へ海上交通の役務を期待していなかったからではなかろうか。最上氏時代に平沢の湊は途絶していたのではないし、当時、斎藤家が海運業にタッチしていなかったとみなすのは、いかがかと思われる。

藩政時代の平沢は、最上改易の後、明治維新に至るまで、元和9年(1623)に入部した江戸幕府の旗本仁賀保氏の領地であった。寛永8年(1631)、仁賀保良俊が死亡して同家の七千石が天領に編入され、仁賀保氏領は仁賀保誠政に二千石、同誠次に千石が認められ、誠政家は二千石家、誠次家は千石家と各々称され、両家共に陣屋を平沢においた(地図1)。

時代は若干降るが、斎藤家は嘉永5年(1852)の「斎藤市兵衛上申書」(斎藤家文書)によれば、代々平沢の町方で宿老を務め、大庄屋役に任命される家柄であ



地図1 藩政時代の由利郡

った。仁賀保氏は旗本一般の例に漏れず、幕府より江戸在住を下命されていたので、同領は同家の給人10名程で支配にあたり、実質的には斎藤家をはじめとする町方・村方の有力な商人や農民によって運営されていた。なお天明8年(1788)の「本荘問屋訴状に対する平沢・三森問屋返答書」(『市史』史料編Ⅳ 本荘市 1988年 No.190)と、前掲「平沢斎藤市兵衛等口上書」によれば、斎藤家が「問屋船宿」を開始したのは17世紀前半の寛永年中であって領主仁賀保氏の命令で「廻船問屋」を始めたという。また領主仁賀保氏のみならず、近隣の領主の蔵米や雑穀などの諸品を売却する目的のもとに問屋として出発したとあり、領主的な要請に基づいて藩政時代の平沢斎藤家は、近世の「廻船問屋」家業に乗り出した。

平沢の湊の規模は、寛政10年(1798)7月の「斎藤市兵衛口上書」(斎藤家文書)によれば、二百石積みの船舶の入港は可能であるが、三百石積みの船になると不可能であって、隣村の鈴村の湊に入港してもらうことになっていた。したがって平沢の湊は、せいぜい二百石積みまでの船が入港できる程度であった。これらの船は、大きさからみて当時「小廻船」と呼ばれた船ではなかったか。例えば庄内酒田に入港した船のなかで、二百石積み程度の船は加賀・越前・能登のものが多く、それらは「小廻船」と呼ばれ、2月から3月上旬に空船でやってきて何回も酒田湊に出入りして船稼ぎをやっていたという(『山形県史』第3巻 山形県1987年)。平沢の湊に入ってきて、斎藤家との間で諸品の売買取引をおこなったのは、これらの「小廻船」が多かったと思われる。なお日本海海運に従事する船舶は、基本的に買い積み船であって、A地点からB地点へ物資を運搬して運賃を稼ぐ貨船ではなかった。

2 「仕切帳」から見た平沢斎藤家の交易活動

天明8年(1788)、本荘問屋から提出された訴状(『市史』史料編Ⅳ No190)は、平沢斎藤市兵衛と三森泉屋市郎兵衛の両問屋の商業活動を告発する内容であって、それに対して両問屋は、寛政元年(1789)正月に回答しており、それは幕府評定所へ宛てたものであった(斎藤家文書)。本荘問屋側の趣旨は、次の2点に集約される。第1は、近年開業した平沢・三森の

両問屋は、荒磯あらいそに商船を強引に停泊させて商品の売買・交易をおこない、それによって本荘湊へ廻船の入港が激減し、同湊問屋の商いに支障を来している。第2は、両問屋の強引な交易によって、天明の大飢饉による雑穀の高騰が著しく助長され、本荘への入船と交易によって生活している小身の者達の困窮は増し飢餓に及ぶほどである。是非とも両問屋の活動を停止して欲しいというものであった。これらのことは、裏返せば18世紀後半の平沢・三森両問屋の商業・交易活動が、旧来の本荘問屋の死命を制するまでに成長していたことを示唆していよう。

由利郡内でもトップの規模を持つ本荘湊の問屋へ脅威を与えた、平沢斎藤家の交易活動とは、いったい如何なるものであったのであろうか。それを伺うのに最適な史料として、斎藤家には、明和・天明・寛政の売買仕切帳ばいばいしきりなうが残されており、明和・天明期の売買仕切帳による分析は、半田市太郎氏の「羽州・平沢村問屋斎藤家の経営」(『秋田経法大経済学部紀要』第1号、1984年 以下、半田氏論文と略記)に詳細に述べられており、本稿では、半田氏論文の成果に寛政期の同仕切帳の分析を加えて、近世後期の同家の経営について言及したい。

斎藤家は上方落語の「貧なだの火」によっても知られる和泉国佐野浦さのうら(大阪府泉佐野市)の豪商食野家めしのと関係が深く、出羽由利諸藩と食野家との仲介役を演じてきたと言われ、斎藤家はあたかも出羽地方の食野家の出張所の観を呈していた。食野家は、井原西鶴いはらさいかくの「日本永代蔵」でその繁栄を紹介された唐金屋かりかねもその一族と

図1 平沢斎藤家明和・天明・寛政期取引品目

移入品

移出品

蝦夷地	余市撰塩引、外割鮭、増毛塩引、撰身欠鮭、並身欠鮭、串貝、鱒、干鱒、
陸奥	早割鮭、魚灯油、数子、鯉節、櫓材木、塩引小豆、生鮭、竹原塩、練綿、昆布、ふのり、身欠鮭、小松塩
出羽秋田領	櫓、杉桶
出羽由利郡内	塩引、塩鱒、干鮭、数子、塩、塩辛、胴鮭、村上茶、昆布、鮭、塩鱒
庄内	外割鮭、筋子、塩引、ほっけ、細布、鯉、烏賊、鮑、鱒、鯨、茶、塩鱒、古手、練綿、玉砂糖、石灰、半仕紙、織草
越後	身欠鮭、村上茶、越後鮭、塩引、綿木綿、晒新潟醤油、数子、貝類、塩鱒、烏賊、ほっけ、餅米、美濃茶、紋り、唐竹、塩、塩鱒、生蠟燭、大川蠟、線香、古手、素類、魚油、半紙、越中綿木綿、佐渡ざる、佐渡表身欠鮭、干鱒、若竹筵、塩鱒
佐渡	櫓
越中	輪島素類、唐傘、茶釜、菅笠、生姜等
能登	丹羽繰り綿、楊枝指、羅紗煙草入、杉下駄、綿、岩見鉄、小松塩
加賀	輪島素類、竹原塩、米子繰り綿、笠、火鉢、大白砂糖、玉砂糖、鉄、大鯉節、村上一番茶海月、
越前	綿布団、米、村上走り茶、極上白木棉、舟櫃
讃岐三本松	波瀬塩、古手
和泉佐野	傘、河内綿、織草、線香
その他	奈良茶碗、生姜、塩鱒、袖なし、鍋、茶、砂糖、夜着古手、縮、左次郎紙、半切れ、とふ綿、天草、越前石、鳥もち

平沢斎藤家

蝦夷地	町米、本石米、矢島蔵米、本庄蔵米、蔵米餅米、鉄長割、
陸奥	蔵米、本石米、障子、杉板、昆布、当地米、町米、大麦、小麦、仙北煙草、煙草、野州綿、綿網布、矢島蔵米、同米、
出羽秋田領	杉板、古手、織草
出羽由利郡内	杉板、小豆、平沢蔵米
庄内	矢島蔵米、本石米、餅米、杉障子、練綿、杉板餅米、枳材
越後	蔵米、本石米、餅米、煙草、杉板、矢島米、餅白米、当地米、小麦、大豆、町蔵米、障子、仙北煙草、根花、干鱒、ゼンマイ、鱒、荳糟
越中	小麦、杉板、杉障子、大麦、小麦、杉戸板、数子、荳糟、餅米、蔵大豆、町大豆、黒大豆、当地米、矢島蔵米、小麦、鰯、
能登	当地蔵米、当地米、大豆、杉板、亀田米、矢島米、矢島蔵米、餅米、障子、小豆、大麦、小麦
加賀	亀田米、杉板、障子、本石米、大豆、小豆、亀田蔵米、数子、矢島米、笹子煙草、餅米、本石米
越前	亀田御米、荳糟、矢島米、根老、杉板、干鱒
讃岐三本松	米
神戸	仁賀保米
大坂	干鱒
和泉佐野	仙北煙草、大豆、煙草
その他	干鮭、杉障子、小麦、餅米、小豆、杉板、米、本石米、鮭

いわれ、^{かいまいたんぼ} 彼らは廻米担保の大名貸しを行なう上方の巨大な商業資本として、江戸時代中期より活躍した。斎藤家と食野家との関係の開始の時期は、実はよくわからない。安永9年(1780)の食野家への渡米目録などによって、本荘領、仁賀保領、^{やしま} 矢島領、^{いわきかめだ} 岩城亀田領、由利郡内の天領の蔵米が、斎藤家を介在して食野家の廻船へ積載され、大坂・江戸へ廻漕されたことが判明する。当然の如く食野家への蔵米の売却額は巨大であり、その口銭が斎藤家にとって最も大きな収益であったのは疑いない。特に一手に引き負っていた領主仁賀保氏の蔵米の売却は、他の取引品とは比較にならぬ大きな比重を占めていた。食野家の大名貸しや金融活動については、上村雅洋「泉州の豪商食野家の金融活動」(『大阪大学経済学』第31

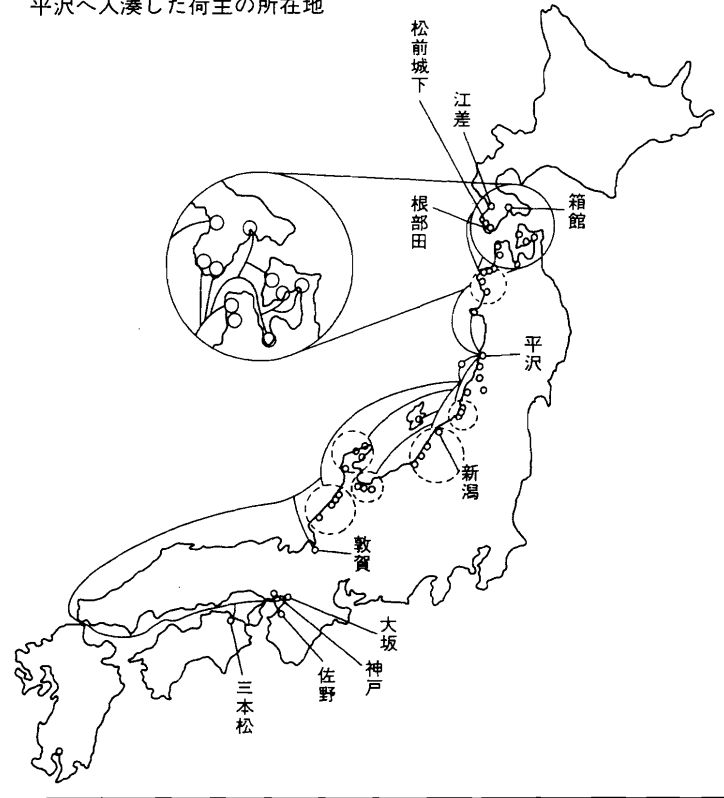
巻第4号 1982年)を参照のこと。

本稿では、仁賀保氏の蔵米売却の他に斎藤家が平沢の湊に入港してくる廻船との間で展開した、日々の商業活動に主眼点をおいて斎藤家を中心に繰り広げられた物の移出入をまず確認してゆこう。

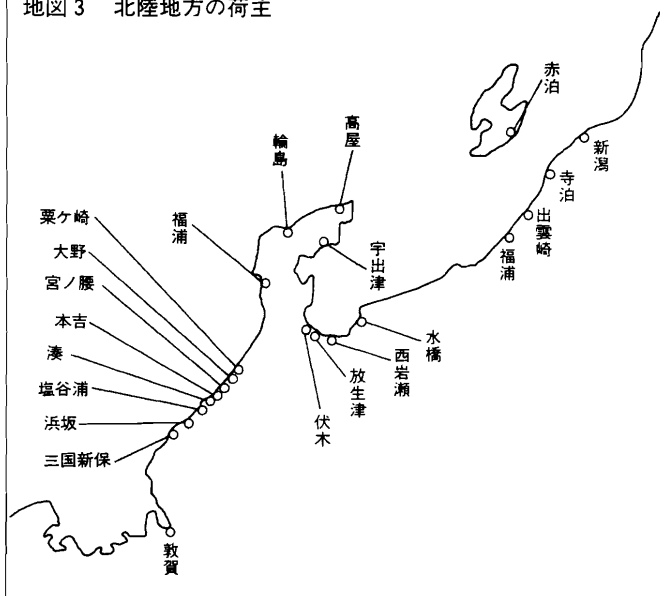
図1は、明和、天明、寛政にかけての斎藤家の売買仕切帳をもとに、平沢斎藤家が扱った諸交易品と荷主の所在地を図示したものである。仕切帳とは、日々執り行われる取り引きを毎日付け込んでいった簿冊で、「御売仕切」と「御買仕切」の二つから成り立っている。「御売仕切」とは入港した船から斎藤家が諸品を購入する商行為を、一方の「御買仕切」とは、同じく入港した船へ斎藤家が諸品を販売する商行為を指し、売買仕切帳はこの双方の商行為を記録する。平沢の斎藤家と

地図2

平沢へ入湊した荷主の所在地



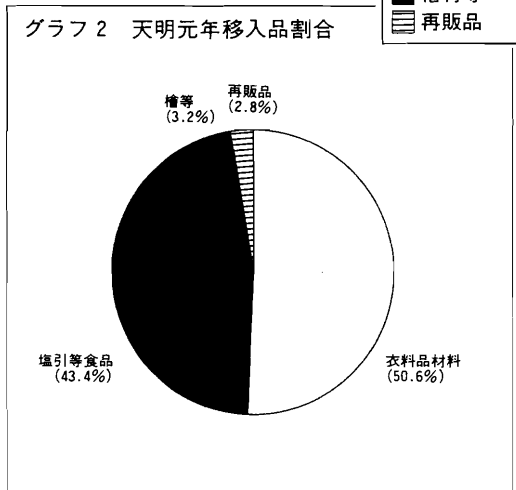
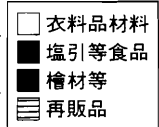
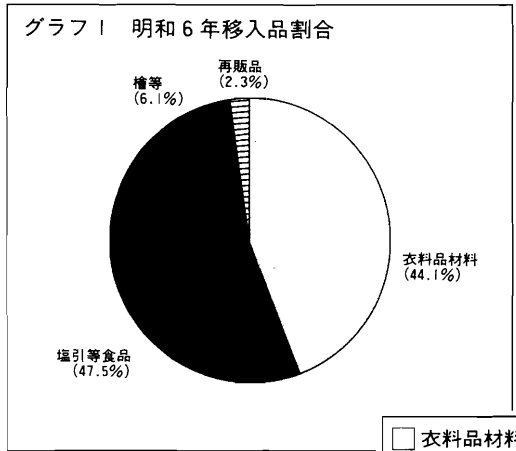
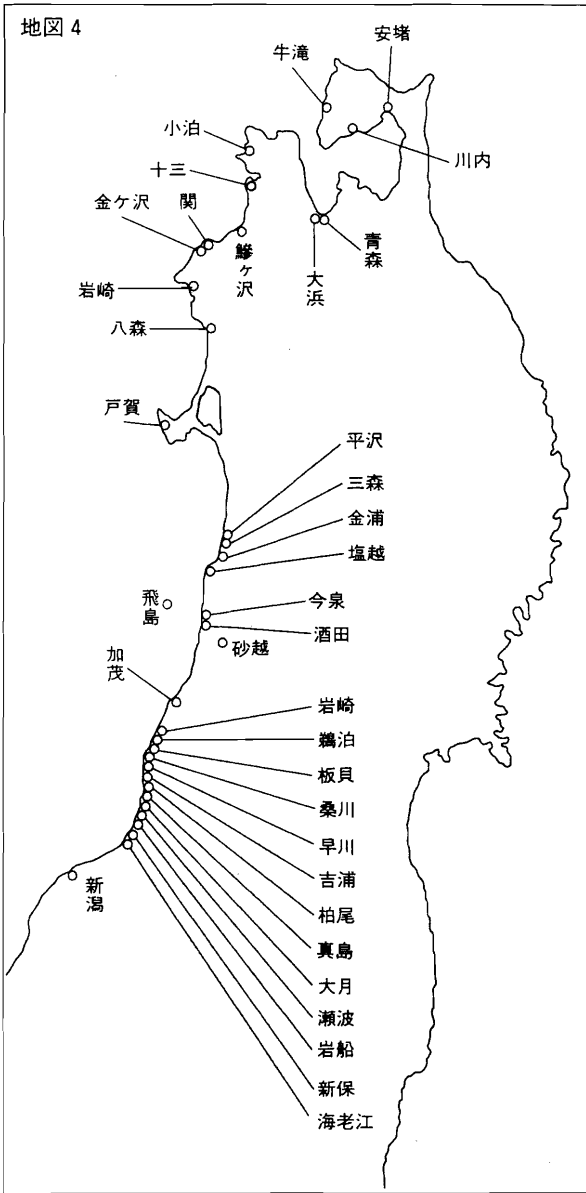
地図3 北陸地方の荷主



の間で交易関係があったのは移入・移出
 ともに北は蝦夷地から南は和泉佐野・讚
 岐三本松までであり、主として日本海沿

岸地域、なかでも越前までの地域がその活動範囲として濃密に認められる。九州、太平洋沿岸の地方は対象となっていない(図1と地図2、3、4を参照のこと)。

(1)移入品からみた地域と交易品の特色について 移入品は年によって相違するが概ねの傾向として、木綿・古手・繰綿などの衣料品・衣料材料などとともに鮮類(身欠鮮等)、数子、塩引など蝦夷地産品の量や種類が圧倒的に多く、その他茶・砂糖・輪島素麺・醤油などの食品、檜材、越中より西の能登、加賀、越前などは、唐傘・下駄・煙草入れ・茶釜・塩など、上方の手工品が目につく。また移入品の取引額から見ると、グラフ1・2に見えるように、衣料品とその材料が40~50%、塩引等の食品類が同じく40~50%、檜材や鉄等が10%以内、米などの再販品が5



かねがさわ
金ヶ沢・岩崎などで、蝦夷地の産品の他に檜があるが、これは青森ヒバを指すものであろう。下北半島では、うしたき かわうち
・安堵(むつ市)で、津軽側とほぼ同様の品を扱う。秋田藩領では、八森・戸賀があり、檜や杉桶をもたらしている。由利郡内では、平沢の隣村の三森、塩越、金浦から塩引の他に蝦夷地の産品が移入され、これは平沢の湊の規模が小さいため、三森などの湊に入った船の商い品を齋藤家が改めて購入したものであろう(渡辺信夫「鮭文化圏の歴史的考察」<同氏編

%弱であった。

より具体的に検討すると、蝦夷地の松前城下・箱(函)館・江差などの有力な湊からは、身欠鮓・数子・干鱈・串貝・鱒などの蝦夷地特産の食品がほとんどである(酒田と蝦夷地の交易に関しては、榎森進「日本海海運と酒田」『地方史研究』184 1983年を参照のこと)。津軽ではおおはま
は大浜(青森市油川)や青森その他青森県の西海岸の小泊、ひゆうさん
・十三・鱒ヶ沢・関・

『近世日本の生活文化と地域社会』河出書房新社 1995年〉は、東北地方の鮭食文化について再考を促し、蝦夷地の鮭の流入のみに目を奪われるべきでない（注意を喚起している）。庄内では酒田・飛島・加茂・砂越からの移入品で、蝦夷地の製品のほかに砂糖・茶・イカ・鮑・鰻・鯨などの食品、古手・線綿・木綿などの衣料品、石灰、半紙などの日用品がもたらされた。

越後では新潟をはじめとして、岩船などの下越地方の極めて小規模の湊と、中越でも寺泊・出雲崎などからの荷が移入され（地図3・4参照）、蝦夷地の製品のほかに村上茶・塩・醤油・素麺・砂糖・塩麴などの食品、縞木綿・越中縞木綿・古手などの衣料品、若竹筵・佐渡ざる・佐渡表・蠟燭などの日用品などである。越中（地図3参照）では水橋・西岩瀬・放生津・伏木から、輪島素麺・生姜などの食品、唐傘・茶釜・菅笠などの日用品が移入された。能登では輪島・宇出津・福浦から塩の外に、丹波線綿・鉄・杉下駄・羅紗煙草入などの日用品。加賀では粟ヶ崎などから、輪島素麺・塩・砂糖・鯉節などの食品、笠・火鉢などの日用品が、越前では三国新保などから縞布団・茶など。讃岐三本松からは波瀬塩や古手。和泉佐野からは傘・線香・極上白木綿のほか、舟鱸、織草などであった。

(2) 移出品からみた地域と製品の特色について（図1参照）前記の通り移出品については、若干相違する地点もあるが移入品とほぼ同様の地域的な傾向を指摘できる。図1を参照していただければお分かりと思うが、移出品目は、特定の地域

へ特定の産品が集中的に移出されるという特徴は認められず、これは平沢斎藤家の特色というよりは、当時の由利郡全体の生産構造に規定されていた、と考えてよからう。移出品で目に付くのは、米穀類—これには仁賀保氏をはじめとして本荘領・矢島領・亀田領などの領主蔵米や天領の幕領米のほかに、町方の米など—であり、餅米、大麦・小麦・大豆・小豆などの食品、仙北煙草・笹子煙草などの出羽地方特産の嗜好品、杉板・鉄・障子などがあり、取引額も大部を占めるのが米穀である。なお秋田の戸賀への古手・織草、越中への数子、その他干鮭などは再販品と考えてよからう。

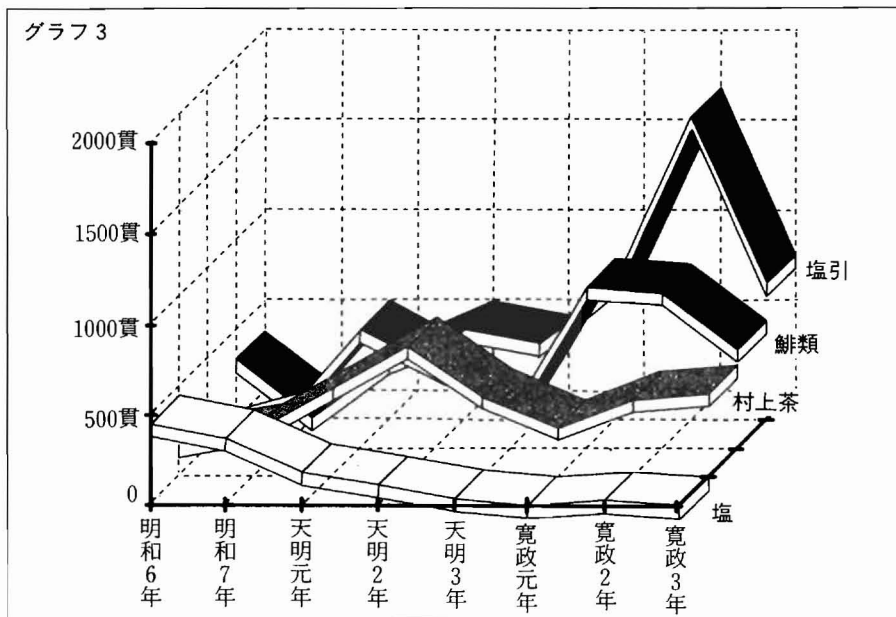
半田氏論文にも指摘されているように、斎藤家の場合、蔵敷料（倉庫の保管料）が仕切帳にほとんど見られないので、蔵預かりを原則的に必要としない商いをしていたと推測される。前掲「本荘問屋訴状に対する平沢・三森両問屋返答書」にも、平沢へ入船があった時には入港船の荷物と、入港船へ売却を企図している諸品については、商人達を参集させて秋田や庄内の湊の適正な相場の値段で売買を実施している、とあるので、交易品を斎藤家の蔵で長期に保管することをせず、品物はごく短期間に取り捌かれたはずだから、再販品が量的に少ないのは当然であった。

移出品の特徴は次のようにまとめられよう。仙北・笹子煙草など由利郡・出羽地方のわずかな特産嗜好品を除けば、おおむね米穀・麦などの穀物類や大豆類、また出羽特産の杉材などが主であって、平沢からの移出品は米穀などの第1次産

品が主流であった。したがって由利郡平沢の斎藤家を舞台に展開した交易活動は、第1次産品を移出して、蝦夷地の塩引などを主とする、人々の蛋白源となる北方産食品の大量の購入と、衣料品ならびに衣料材料、塩、砂糖、茶、傘・茶碗などの上方やその他の産品—これらはおおむね第2次・第3次産品と呼んでよいであろう—を移入するという交易構造になっていた。

3 村上茶と由利郡

グラフ3は、移入した食品類のなかでも大きな比重を占める塩引・鮭類・村上茶・塩の移入高の推移を示したものである。この中で平沢斎藤家による村上茶の購入はコンスタントに行われ、塩引等の蝦夷地産品に匹敵する取扱額である点^{かえつわらかみ}が注目される。そこで越後でも下越村上地



方の荷主の分布(地図4)を参照していただきたい。新潟県北部、山形県との境に近い岩船郡・村上市を中心とした地域に、岩崎・鶴泊・板貝・桑川・早川・吉浦・柏尾・真島・大月・新保・岩船・瀬波・海老江などの小規模な各湊が集中している。これらの湊の荷主が出羽平沢へ茶を大量に運漕してきた。平沢の斎藤家へ下越の湊からもたらされた茶が村上特産のものであると推定するのは、それら

には「村上茶」とブランド名が記され、しかも岩崎をはじめとする村上地方の各地点からの船荷であるのが明確であることによる。

周知の如く新潟県の村上地方は、茶栽培の北限の地として知られ、藩政時代より茶の栽培が行われていた。元和期に村上へ導入された茶は近世期を通じて生産され、元禄期に入ると芯摘製法という新たな製茶方式が導入され、宝永2年(1705)

には村上町の茶畑の面積は110町歩余りに達した。寛政3(1791)、同7の兩年、当時の村上藩主内藤氏は、茶の交易方を設け、村上茶の秤量と包装について厳しく取り締まり、交易に不都合が生じないようにした。また文政年間には、茶の販路を越後国内のほか、奥羽地方まで拡大し、嘉永4年(1851)、旅出茶取締方から触れを出し、岩船・瀬波両湊から積み出す茶については、製茶が終わった段階で、町役人立ち会いの上、旅出茶取締の検査を受けることを義務づけた。さらに藩は旅人・地商人の茶の自由売買を一切禁止して、すべての流通茶を旅出茶取締方に統括させた(『新潟県史』通史編4 新潟県 1985年)。このように村上茶は、村上藩の重要な特産品として同藩の交易品に位置づけられており、厳重な管理のもとにおかれていた。

ところで藩政時代に由利郡へ移入された茶が、近世の成立期より村上地方からもたらされた茶であったわけではない。「寛文雑記」(『敦賀市史』史料編第5巻 敦賀市 1979年)によれば、寛文10年(1670)、越前敦賀において越後・庄内・本城(荘)・津軽の各米が入津した際に、総量18万5千俵ほどのうち、5万俵ほどが「茶代米」として決済されたとあり、これらの地方の茶消費は莫大なものであったことが判明する。この中に本荘領の米穀も含まれており、同領からの米の売却が当時敦賀において行われていたことに加え、茶の購入も米の売却代金を引き当てて敦賀でなされていた。松前の場合も同様で、「松前物」の販売代金1500両のうち500両が「茶代」として敦賀で支払いされ、三

分の一が茶代金として引き当てられている(同前)。「敦賀市史」通史編 上巻(敦賀市 1979年)によれば、近世前期に敦賀より移出された最大の^{くだりに}下荷は茶であって、前掲「寛文雑記」には、移出された茶は美濃茶、伊勢茶、北伊勢茶、政所茶(近江愛知郡)、板取茶、若狭茶とあり、美濃・伊勢・若狭・近江よりの茶が敦賀を經由して各地へ廻漕された。

しかし幕藩体制の確立期に入って、陸奥・出羽の米・大豆類が直接上方や大坂へ廻漕されるようになり、敦賀着津の船数・米俵数の減少が元禄・宝永・享保期に至り顕著になって、敦賀の市況に打撃を与えた。さらに下荷の茶は、北陸地方に製茶の業が興り、享保・元文の頃には、越後辺りにも茶園ができて敦賀よりの売茶に依存しなくともよい態勢となったという(前掲『敦賀市史』通史編 上巻)。幕藩体制後期に下越の茶の生産と販売が盛んになったことを述べたが、18世紀に入ってから米・大豆類の敦賀への入津が減少すると同調して茶の移出も減ることになり、それに代わって下越地方の村上茶が由利郡へ移入されるようになったと考えられる。しかし村上茶のみが入ってきたのではなく、美濃茶の品名も齋藤家の仕切帳にわずかに見えるので、美濃茶の移入は細々ながらも継続していたのであろう。

それでは、平沢齋藤家も含め由利郡内の各湊へ移入された村上茶は、果たして由利郡で消費されたのか、それとも郡外へさらに運搬されて他の消費地へもたらされたものか、その点が問題になってこよう。

紙幅もつきたので、ある程度の見直しを述べて本稿を終えることにしたい。秋田県本荘市畑谷の高野家文書に、正徳3年(1713)から同5年にかけての「売買諸色帳」(『市史』史料編Ⅳ No151)と題する帳簿が残されている。高野家は、藩政時代、亀田藩の在方において商業を営んでいた家で、「売買諸色帳」によれば正徳4年の売り立て目録中に、木綿・布団・古手・帯などの他に、取引量の三分の一を茶が占めており、茶には「村上」の名が見えている。その他に身欠鯉の売り立てもなされている。なお別の正徳4年の「売買諸色帳」によれば、「村上茶」は、本荘藩領の本荘城下へ仕入れに行き、それを購入して来て領内へ大々的に売買していたようである。村上茶や鯉の仕入先は不明であるが、おそらく本荘の古雪湊もしくは塩越、あるいは平沢・金浦から斎藤家のような船問屋を通じて由利郡の在方商人へ渡り、郡内の人々にもたらされたものと考えられる。すなわち、藩政時代の中期以降、由利郡内においては、蝦夷地産の塩引や身欠鯉など北の物産が人々の蛋白源として、一方、南からもたらされた、下越地方の村上茶に代表される茶がビタミンの補給源・嗜好品として、人々の食生活に欠かせないものとなっていたのである。まさに平沢斎藤家の南北交易の世界は、藩政時代後期由利郡の再生産と人々の食生活の仕組みを如実に反映するものであった。

おわりに

以上簡単ながら、平沢斎藤家の売買仕

切帳からかいま見た近世後期の由利郡の状況を述べてきた。我々の予想を越える斎藤家の交易範囲と活潑な活動は、由利郡の広くかつ農業生産性の高い土地柄に支えられたものであったことは十分に想定されるところである。

このような豊かな後背地の存在もさることながら、比較的自由に交易・商業活動が可能であったのは、各藩領の規模が小さく、しかも旗本領や天領が大名領と錯綜していたため(地図1)、由利郡の支配のあり方はきわめて緩いものであったことにも起因しよう。残された課題は多いが、近世後期由利郡における交易・流通、再生産、人々の食生活のあり方などについて、述べた次第である。



《略歴》

長谷川 成一 (はせがわ・せいいち) 氏

1949(昭和24)年1月生まれ。1971(昭和46)年弘前大学人文学部卒業。1973(昭和48)年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(国史学専攻)。1974(昭和49)年東京大学助手(史料編さん所)。1978(昭和53)年弘前大学人文学部へ転任。1989(平成元)年弘前大学人文学部教授。現在に至る。
著書/『失われた景観—名所が語る江戸時代』(吉川弘文館)、共書/『海峡をつなぐ日本史』(三省堂)、編著/『北奥地域史の研究—北からの視点』(名著出版)、『図説青森県の歴史』(河出書房新社)など多数。